

製材加工による利益を山に還元する ～森林組合がつなぐ川上と川中～

十勝広域森林組合 鈴木 壱哉



■はじめに

十勝広域森林組合（以下、十勝広域）は道東の5市町村（帯広市、芽室町、池田町、豊頃町、中札内村）をエリアとしています。十勝広域は、製材工場を併設する道内では数少ない森林組合の一つとして、カラマツから一定量の集成材ラミナを生産しています。それは、原木を加工し、付加価値をつけて販売することで利益を高め、その利益を（山に）還元する、という考えに由来しています。

そこで、十勝広域の建築材生産に向けたお考えについて、鈴木第1業務部長に伺いました。

（文責：普及協会・菊地）

■建築材需要への対応

森林組合の製材工場と、そうではない専門の製材工場との大きな違いは、森林組合の構成員である組合員さんの山を伐った原木を主体に使う、ということにあると言えます。

森林組合の場合、伐ること（伐採）と植えること（植林）は必ずセットになっていて、伐った後には必ず植えます。伐採は機械化が進んでいるので、やろうと思えば伐採量を増やすことができます。一方、人力に頼る植林の機械化はまだ途上で、植栽面積を簡単には増やすことはできず、そのため植林できる範囲内で伐採することになります。また、資源の持続性の点からも無闇に伐採量を増やすことにはなりません。このように、常に山を意識しながら製材工場の運営を考えると森林組合の特徴と言えます。

現在の十勝のカラマツ林は間伐林齢から皆伐林齢に入ってきています。今後、大径材の出材量が増えるの見込んでいますし、実際に増えている感触があります。十勝広域が手がける年間の伐採量は10万m³前後ですが、径30cm上の大径材（写真）はその1～2割程度を占めています。そこで大径材に適した用途のひとつとして、建築用集成材ラミナを増やしていきたいと考えています。関連商社さんにも需要開拓をお願いし

てきているところです。集成材ラミナの価格は上昇傾向にあります。建築用製材に加工し、高く買ってもらい、その利益を山に還元する・・・このような十勝広域の考えは、常に商社や加工工場に伝えています。



写真 径32cmのカラマツ原木

十勝広域の木材加工施設は表1のとおりです。

池田製材工場は、もともとあった製材工場（旧工場）と、豊頃工場を再編して2013年に新設した製材工場（新工場）から構成されていましたが、現在（2022年）、旧工場は廃止されています。ここでは、径30cmまでの原木を対象としています。

芽室製材工場にはツイン帯鋸盤の製材ラインとともに、シングル帯鋸盤の製材ラインも設け、径30cm以上の大径材も挽けるようにしています。

表1 十勝広域森林組合の木材加工施設（2022年現在）

場所	施設
池田町	製材工場（新工場）
芽室町	製材工場、チップ工場
豊頃町	チップ工場

池田製材工場の生産実績を、2019年度を例として表2に示します。製材品に占めるラミナの割合は約3割となっています。今後、これをさらに引き上げていきたいと考えています。

なお、大径材だから建築材向けの良質の製材が得ら

れるということではありません。径30cm以上の原木の中には節が多く、建築に向かないものも含まれています。そのような原木は、まずシングル帯鋸盤で挽き割ってからツイン帯鋸盤にかけて梱包材に製材するので、かえって手間がかかることがあります。

表2 池田製材工場の生産実績（2019年度）

新工場	原木消費量 (m ³)	全体	38,713
		カラマツ	38,452
		トドマツ	261
	製品生産量 (m ³)	全体	16,460
		ラミナ	5,804
		パレット	1,084
		梱包材・仕組材	9,343
	その他製材	229	
全体 ¹⁾	原木消費量 (m ³)		46,693
	製品生産量 (m ³)	全体	19,496
		ラミナ	5,804
		パレット等 ²⁾	13,692

1) 現在（2022年）は廃止されている旧工場での生産量を含む

2) ラミナ以外

十勝広域は人工乾燥装置やモルダラーなどの加工設備は保有していません。十勝広域が製材、乾燥、加工を一貫して手がけるためには、機械設備の新規導入、技術者の育成などいくつもの課題があります。そのため、加工設備や加工技術を持っている企業と商社を介して連携を取りながら、一種の分業のような形で対応しているところです。

現在、十勝広域で生産した製材は、

- ①十勝広域が製材（生材）を商社に販売
 - ②商社が乾燥・加工ラインを持つ加工企業に製材（生材）を販売
 - ③加工企業が乾燥・加工後、商社に販売
 - ④商社が建築関連企業に販売
- の順で市場に流れています。

■トドマツ、アカエゾマツ

十勝広域は多くはありませんがトドマツの山林を所有しています。また、十勝管内には一定量のトドマツの林があります。加工部門を持つ十勝広域は、これらから出てくる樹種に柔軟に対応していかなければなりません。2020年頃から池田工場ではトドマツを梱包材・パレット材に挽き、出荷し始めています。まだ全体の5%程度ですが、徐々にその割合は高くなっていく見込みです。また、トドマツを集成材ラミナとして利用する計画も進めています。まずはトドマツラミナをトレーラー数台程度生産してサンプル出荷し、その評価が良いようであれば増産する考えです。

さらに、トドマツの先に来るアカエゾマツにも目を向けています。組合員の山林にアカエゾマツはほとんどありませんが、国有林・道有林からは出てきます。一度、アカエゾマツをチップに加工したことがありますが、樹皮がうまくむけなかったり、むいた樹皮がシュレグダーに詰まったりなどが起きました。個々の樹種の違いを把握して、適切に扱える技術を積み重ねていかなければなりません。それが、加工工場を持つ森林組合の役割なのだろうと考えています。

謝辞

十勝広域森林組合の鈴木部長には、組合の事業内容について長時間にわたりご説明いただきました。また、多くの資料をご提供いただきました。厚くお礼申し上げます。

なお、2022年4月12日の組合臨時総代会で、製材工場を新設し、集成材ラミナの生産体制を充実させることが決定されています。本稿「■はじめに」で紹介した「原木を加工し、付加価値をつけて販売することで利益を高め、その利益を（山に）還元する」方向のあらわれだと感じられます。

■参考資料

- 1) 十勝広域森林組合の事業展開：民有林新聞、2021年9月2日。